

第15回 皮膚科の臨床 優秀論文賞発表

本誌編集委員会では、昨年（第60巻、2018年）に掲載されたものを対象に優秀論文の選考を行ってまいりましたが、この度、下記論文に第15回「皮膚科の臨床 優秀論文賞」を授与することに決定いたしました。

動脈血流入部を圧迫することで軽快した、先天性多発動静脈瘻に伴う難治性下腿潰瘍 高橋 道央ほか（東京都立墨東病院皮膚科）

55歳、男性。34歳時より下腿に難治性潰瘍を繰り返した。他院で計8回の静脈瘤手術を施行され、そのたびに潰瘍は一時的に軽快したが再発を繰り返した。3カ月前から右下腿末梢に難治性潰瘍が出現した。超音波検査とCTでの血管造影を行い、動静脈瘻による潰瘍と診断した。弾性包帯による圧迫と下肢挙上を行ったが難治であった。しかし動脈血流入部の圧迫を加えたところ、動静脈瘻からの流入血が著明に減少し、下腿潰瘍は軽快傾向となった。動静脈瘻に伴う下腿潰瘍は通常の静脈逆流による潰瘍と臨床像が似ており、診断や治療に注意を要する。動静脈瘻流入部を包帯を使用して圧迫する方法は、侵襲の少ない方法で診断と治療効果判定を行うことができる有用な治療法と考えた。

（第60巻 第9号、1384-1388頁、2018年）

選考評

下腿潰瘍は、治療に難渋する疾患のひとつである。特にストリッピングや硬化療法などの静脈瘤の治療で改善しない場合には、原因が特定できないまま弾性包帯や弾性ストッキングと下肢挙上で対応していることが多い。高橋道央先生らは、難治な下腿潰瘍の成因を明確にするために、超音波とCTでの血管造影を行って動静脈瘻を確認し、瘻孔が複雑で両側性であることから先天性動静脈瘻と診断している。さらに、単なる弾性包帯での圧迫では軽快しないため、動脈血流入部位の圧迫を行ってCTで動脈血の静脈への流入が著明に減っていることを確認し、臨床的改善も臨床写真で示している。難治な疾患を明快に診断し、ちょっとした工夫で治療をしてしまうというのは、いかにも名医でかっこいい。そこに動静脈瘻圧迫後の造影画像と改善後の臨床写真という有効性のエビデンスが示され、新奇性もある。まさしく優秀論文賞にふさわしい論文である。

受賞のことは

このたびは優秀論文賞に選んでいただき、厚く御礼申し上げます。診断、治療法が確立されていない分野であり、自分にとっても非常に印象的な症例です。

墨東病院皮膚科には難治の症例が多数紹介され、うっ滞性皮膚炎・難治性潰瘍の患者を数多く経験します。本症例は安静と厳格な下腿圧迫で軽快せず、沢田部長をはじめ科内で相談しました。静脈瘤手術後に再発を繰り返したことから、伏在静脈逆流がなくとも異常に拡張した静脈が多数みられたことから動静脈瘻を疑い、画像で証明しました。病態を考えると動静脈瘻を塞げばよいのですが、瘻孔は多すぎるうえに、コイル塞栓が困難な末梢にもありました。しかし丸めたガーゼで動静脈瘻を外から圧迫したところ、シャントが止まり、翌日には明らかに潰瘍面の浮腫が軽快しました。画像を撮り直し、多数写っていた動静脈瘻がなくなっていることを確認しました。下肢静脈瘤の血管内焼灼術が保険適用になるなか、病態をよく検討せず手術をしても治癒しない症例として意義深いものと考えます。

私は現在他病院に勤務しておりますが、うっ滞性皮膚炎・潰瘍の患者には他科から機械を借りて静脈エコーを行っています。これまでは気づきませんでしたが、同様の症例は多いと感じています。本症例から得られた、所見と証拠を集めて検討する経験を活かし、先輩や他科に相談しながら境界領域の疾患にも取り組んでいきたいと思えます。



- 受賞論文の筆頭執筆者には、賞状ならびに副賞として金一封・記念品を贈呈いたします。
- 本誌編集委員会では今後も優秀論文賞の選考を行ってまいります。投稿規定を熟読のうえ、奮ってご投稿下さい。